舟到馬關

駛潮如箭幾灣々。白石洋連赤馬關。到此歸心先一笑。寸青穿眼鎮西山。

丹釀一樽遠挈提。斟來嘉栗到吾臍。醉中唱出賴翁句。隔岸青山是鎮西。

夜渡玄海抵博多

桅檣影凍海潮寒。峨艦凌風七十灘。波打鰲身漂二嶋。月摩鯨背落三韓。撚鬚聊且供長嘯。燥髮初逢此壯觀。投錨一聲天未白。霸家臺下賀安瀾。

入筑後

曾識美遊輸惡歸。故林況又夢依々。唯嗟行色沈淪甚。仍舊青山映布衣。

哭弟未休還哭母。悲哀三歲夢荒涼。那堪今日提携少。獨護阿爺歸故鄉。

歲暮　助教授　園哲雄

四九光陰今欲空。蹉跎未奏馭戎功。窮來始悟男兒業。多在畢生坎懍中。

歲旦　二首

黎民豈宜仰堯天。拜賀明治廿七年。壽頌成時先試筆。紙中無處不祥煙。

日往月來歲一周。東山微白瑞煙稠。至尊親拜四方處。紅旭照臨六大洲。

山中逢雪　硯友會員　杉山富槌

寒風颯々凍雲昏。飛雪紛々路僅存。前嶺後峯滿眸白。溪間失却數家村。

稼堂先生曰。非生於雪國者。不能知此詩之妙。

幽居初夏

江上林莊靜。竹孫過柴扉。雨餘新綠滴。殘蝶送春歸。

又曰。惜春之意在言外。

初夏新晴

細雨始收天地鮮。江頭橋畔樹相連。幽居不恨無人問。萬綠叢中聽杜鵑。

又曰。初夏之景。曲盡於結句七字中。

江津湖上監督親睦會席賦上似仝學諸子

澄江十里水悠々。一片輕舟漁唱幽。綠樹蒼蒼連荻渚。白鷗點々掠芦洲。西山烟鎖落霞遠。天外雲晴夕陽流。師弟同酔垂柳畔。紅塵洗盡倚高樓。

さつきの廿六日、たのか學校の人々、五松庵といふ家につどひしけり、その日、ゑか友なる永井の君も、同ぢくそのむしろにつらなりて、酒のみかはしけるに、ろのあくる朝、おのれいさゝか、尋ぬへきことのありて、訪ひけるよ、今しがた、俄にこまかり給ひぬとて、妻なる人の泣きしつみける、こはろもいかに、と問へど、たゞ絶えもいらんはかりになむなきける、人の死ぬる、誰にか悲しらざらめやは、しかはあれと、をみなわらはの十一二歳なるを、はしめて、三人のをさな子をれきて、この世をはやうせる、その悲しさ、たとしへあらんや、さるほとに、例のわさともせんとて、あゑたゝしく、人のものするに、妻なる人の、父うへの顔みるも、々ふ限なり、よく見てなとて、をさな子の手をひきつゝ、なきからにとりすがりけるも、をさな子のあどなき、なにろゑらん、只はゝゑみて、人のうちよるをよろこび顔なる、あはれや、終のわかれとも、しらぬことよ、とまたなきふせる、目もあてられす、涙とともにうかみいつるまゝをかきて、靈前に手向ける、

宇　衛

たゑ〳〵にみのり玄ものをちゝの木の
　かれゆく末をけふいかにせん

さつきやみものゝあやめもわかぬまて
　ろきくらしけりわかれつらしも